

子牛の臍部異常とフィールドでの対応

家畜部・西播基幹家畜診療所

○野口 等 小田修一 玉井 登 菅 保礼

宇崎敬与 柳澤義人 森本啓介

演者らは 1993 年に臍帯炎予防チャートを発表した。しかし、依然として臍帯の異常を示す子牛が散見されることから、子牛の臍部異常の問題点を明らかにし、フィールドで行っている臍帯炎予防対策と臍ヘルニア・遺残臍帯等の臍部異常子牛への対応を整理した。

材料および方法

1. 臍帯炎の実態調査として、家畜共済引受台帳より 2 ヶ月齢以下の子牛の臍帯炎発症状況、性別、初診日齢、発熱の有無、白痢併発、治療回数および転帰を診療簿から調査した。また、県下の子牛臍帯炎予防を目的とした消毒の実施状況について調査し、臨床現場での臍帯炎発生の問題点を整理した。
2. 1993 年に作成した子牛の臍帯炎予防チャートの 2013 年改訂版を作成し、臍帯炎の予防対策について検討した。また、子牛の臍ヘルニアと遺残臍帯（尿膜管・臍静脈）等の臍部異常子牛に対しての診断と処置についても検討した。

結果

1. 臍帯炎発症調査では、出生頭数は 5,249 頭で、臍帯炎は 82 頭（1.6%）であった。臍帯炎を発症した 82 頭の性別は雄 54 頭、雌 28 頭であった。臍帯炎の症状別に臍帯腫脹の 52 頭、臍帯に局限した化膿の 25 頭は全頭治癒し、腹膜炎を併発した 5 頭は死亡した。また、白痢の併発は 41 頭に認めた。
2. 子牛臍帯炎発症の問題点としては、出生直後の臍帯汚染がそのまま放置されている、子牛の管理まで手が回らない等であった。出生直後の子牛臍帯処置の問題点については、臍帯内部を開ける事により細菌の侵入門戸を開放してしまう事、刺激性の強い薬剤での消毒等が挙げられた。また、獣医師の認識不足と問題意識の低さがあった。
3. 改定した臍帯炎予防チャートについては、臍帯消毒剤は刺激性の少ない 0.01% ゲンチアナバイオレット液で行い、断裂した臍帯内部は開けないで付着した汚物の水洗をし、臍帯外側部のみを消毒する事であった。
4. 子牛の臍ヘルニアと遺残臍帯（尿膜管・臍静脈）異常の診断と処置については触診だけでは非常に難しく、超音波検査を行って腹腔内の遺残臍帯構造の観察と外科的処置を施す前の感染症のコントロールが重要であった。

まとめ

子牛の臍部異常は、農家の啓発だけでなく臨床獣医の意識改革が必要であり、臍帯炎予防処置の実施により子牛の損耗防止も期待できるものと推察する。また、臍部異常子牛へのフィールドでの対応については、超音波検査を行うことでより確実な子牛の臍異常の診断が可能であり、外科手術に際しては感染症のコントロールが最も重要であると考ええる。